

飯館村の全村避難とがん

がん社会 を診る

中川 恵一

牛の「飯館牛」も有名です。

事故直後の2011年4月、福島の大規模な放射線汚染の調査を行った際、菅野典雄村長(当時)にお目にかかったことを機に、この村の「リスクコミュニケーション」に関わってきました。

飯館村は原発から北西方向に30〜45kmも離れていますから、原発立地としての経済的恩恵はなく、村民への放射線教育もほとんどなされていませんでした。

東京電力福島第1原子力発電所の事故から14年目の春です。最近を訪れる機会も少なくなりましたが、数年前までほぼ毎月、福島を訪問してきました。

江戸っ子の私が福島にご縁を頂いたきっかけは飯館村でした。

飯館は自然に恵まれた美しい村で、私が留学していたスイスを思い出させます。年間の平均気温は約10℃、冷涼な気候を利用した高原野菜や花弁(かき)の生産や、黒毛和



イラスト 中村 久美

しかし、3月15日の夕方から翌朝にかけて、セシウムな

どの放射性物質を含む雲状の「プルーム」が村の方向に流れ込みました。プルームが村の上空にさしかかったときに降雨が重なり、放射性物質が飯館の地に降り注いだのです。風と雨という偶然的気象条件によって、村の放射線量は福島県内でも有数の高さとなっていました。

原発事故が起こった際、原発との距離以上に重要なのが風向きなどの天候です。当たり前の話ですが、このことは今後の避難計画でも重要なポイントだと思います。

11年4月当時、役場に隣接する特別養護老人ホーム「いたてホーム」の入所者の避難を巡り、老人ホームを含む「全村避難」を指示する政府と飯館村は対立していました。

当時、ホームには約100人のお年寄りが入所していました。入所者の平均年齢は80歳を超え、最高齢者は102歳。要介護度は平均4と重く、自力で動けない人が大半でした。

ホームを訪問した私たち「チーム中川」は、施設の放射線量を測定した上で、避難しない方がプラスと判断し、村長にも伝えました。

仮に放射線によってがんが誘発されたとしても、1ヶ月の大きさに進行するには20年といった年月がかかります。高齢者の避難は健康上のマイナスが大きく、ホームにとどまるのがベストと考えたわけです。

当時の民主党政権に掛け合い、ホームは全村避難の対象外となりました。以後、村民向けの回覧板、壁新聞、仮設での相談会、飯館中学での授業など、チーム中川による飯館支援は10年も続きました。次回も原発関連の話題をとりあげるつもりです。